

[追悼]

堀口萬吉さんを悼む

神谷英利*



2010年3月14日，埼玉県川島町三竹遺跡見学会にて

化石研究会創設の頃からの会員であった堀口萬吉さん（埼玉大学名誉教授・日本地質学会名誉会員）が、2017年12月26日に逝去された。88歳と9か月だった。心からお悔やみ申し上げる。

堀口さんは1929年（昭和4年）3月に埼玉県秩父郡槻川村で出生された。その名の通り、荒川の支流とぎ幾川がわのまた支流である槻川つきがわの最上流部に位置する村で、山を西に越えて少し行けば、地質学上有名な長瀨である。後に下流側に隣接していた大河原村と合併して、現在は東秩父村となっている。埼玉県で唯一の村であり、下流の小川町と同じく、昔から和紙作りが行われて来たことで知られている。偶然であるが、この村は私の父の生まれ育った所、つまり、実家のある所で、私も子供の頃に父に連れられて何回も行ったことがある。槻川の河原に露出する石をハンマーで叩いたりした記憶もあり、私自身が地質学への道を進んだことも関係しているかも知れない。

それはさて置き、堀口さんは1948年（昭和23年）に教員を目指して埼玉師範学校に入学したが、これが翌年1949年（昭和24年）に新製の埼玉大学となり、教育学部中学校課程理科に在籍することとなった。しか

し、野外観察などを通して、地質学に興味を持つようになり、翌年に文理学部を改めて受験して合格し、同学部理学科の1年生として、地質学を学ぶ道に進まれた。そして、1954年（昭和29年）3月に同学部を卒業された。

戦後発足した埼玉大学は、ほかの新制国立大と同じように、地学分野の教官の数は少なく、分野も限られていた。地質学プロパーの教官は遠藤隆次、森川六郎のお二人のみで、ともに三葉虫や石灰藻、フズリナなど古生代の化石が専門だったので、日頃の話や野外観察もほとんどが古生層（「秩父古生層」）にまつわるものだったと言う。したがって、卒業研究のフィールドも「遠野物語」で知られる北上山地の遠野の近く、早池峰山の南側に当たる古生層の地域であった。この時採取した石灰藻化石は、埼玉大学紀要に報告され、その後、石灰藻化石の研究に本格的に取り組んで行く端緒となった。

私が東京教育大学（教育大）の地質学鉱物学教室を卒業して大学院に入学したのは、1965年（昭和40年）のことだが、毎週1回、大森昌衛先生が主宰する、化石の微細構造を主なテーマとする自主ゼミが開かれていた。1959年（昭和34年）に、日本における古生物学の近代化を目指して、化石研究会が創設されたが、初期の活動の中心は教育大の大森研究室と新大久保にあった（財）資源科学研究所だった。堀口さんはほとんど毎回このゼミに出席されて、石灰藻化石の微細組織に関するご自身の研究紹介や論文紹介をされた。すなわち、古生層から産出する石灰藻化石について、当初の形態学研究から内部の微細な構造の検討まで進めておられた。1960年（昭和35年）の化石研究会第1回例会の記念写真には、井尻正二、大森昌衛、亀井節夫、糸魚川淳二、秋山雅彦、小林巖雄氏らを含む創設時会員とともに堀口さんのお顔を見ることが出来る。

堀口さんの石灰藻の研究は、化石にとどまらず、現生種についての詳細な形態と微細組織の観察に及び、そのため東京大学農学部に通い、電子顕微鏡の技術を習得し、観察を行った。また、室内の水槽で現生の石灰藻の培養（飼育？）もされた。当時としては非常に

* 〒612-0841 京都市伏見区深草大亀谷東久宝寺町12-10

E-mail: kamiyahy@ybb.ne.jp

先進的な研究である。このゼミでは伊豆・下田の教育大理学部臨海実験所を拠点にして、潮間帯の生物などの観察・採集を行うこともあったが、堀口さんも参加されて、海岸で現生の石灰藻について教えていただいたことがある。

しかし、その後、間もなく堀口さんは石灰藻の研究から手を引いてしまうことになった。当時の私にはその理由が判らなかつたが、ほぼ30年後の1995年（平成7年）に堀口さんが埼玉大学を退官するに当たって出版された記念文集に、ご自身でその経過を書かれている。1966年（昭和41年）10月に、遠藤教授によるタイ国産の石灰藻化石の論文（英文）が日本地質学地理学編輯（Japanese Journal of Geology and Geography）に掲載されたが、これはもともと遠藤・堀口の共著として投稿された。ところが、その後、遠藤教授が（この研究の）調査団事務局から「堀口は地団研の主要なメンバーなので、この研究に入れることは出来ない」と言われたから、著者から削除する、と言って来た。さらに、「地団研をやめたらどうか、そうしないと今回のように研究からも見放されるし、学位も取れないよ」と言われた。堀口さんは「自分は地団研の主要メンバーではないが、学生の頃から野外調査や室内の研究について、今までやって来られたのは、地団研の人たちの指導・協力もあったためなので、今更やめる訳には行きません。これまで通り、やって行きたいと思います」と返事をされた。論文や学位と引き換えに、特定の団体からの脱退を迫るとは、今ではほとんど考えられないが、当時は地団研の会員を中心に地質学会や古生物学会の民主化運動が盛んに行われていた時期で、学生・院生の就職や大学教官の人事などについても、差別に関わるような「うわさ」が流れることがあった。

ご本人が言われているように、堀口さんが当時、「地団研の主要なメンバー」ではなかつたと思うが、北上山地や秩父山地の古生層の研究でいろいろとお世話になっていた大久保雅弘氏は、所属する東京大学地質学教室や学会の民主化運動に積極的に取り組んでおられたので、「その一味」と目されたのかも知れない。また、この研究は古生物学会などが中心となって進めていた「東南アジア地域の地質学的・古生物学的研究」プロジェクトの一環と考えられるが、当時、地団研は「植民地主義的」であるとして、批判的な立場を

取っていたと言う記憶があるので、それが関係した可能性も考えられる。遠藤教授は著名な古生物学者であり、のちに埼玉大学長も務められた人であるが、そのような人でもこのような思想・信条に圧力をかけるような行動に出たのである。堀口さんは日頃は控え目でもやさしい人柄であるが、毅然としてこれを拒否したのであり、ここに堀口さんの人となりを知ることが出来る。

しかし、これをきっかけとして石灰藻を中心とする化石の研究から次第に離れ、「秩父古生層」を始めとする「地質」の研究に重点を移すこととなったのであるが、1971年（昭和46年）に化石研究会が総力を挙げて出版した710頁の大冊「化石の研究法」（化石研究会編・共立出版）には、石灰藻化石の連続研磨やスンプ法による形態復元法について執筆をされている。この時、博士課程の院生だった私も末端の一役を仰せつかり、「X線回折装置による生体鉱物の分析法」について書かせていただいたので、なつかしく思い出される。

その後は、以前より調査をしていた秩父山地を中心とする古生層の研究に取り組み、大久保雅弘氏が組織された「秩父地団研」をひとつの拠り所として、秩父山地を始め、広く関東山地の地質の解明に当たられた。さらに、「古生層」だけでなく、関東山地周縁部の第三紀層や第四紀層、関東平野の地下の地質と構造運動、それに関わる古代遺跡など、幅広い研究対象に取り組み、多くの成果をあげられたことは多くの人たちによく知られているところであるが、それらについては化石研究会とは直接の関わりが少ないので、ここでは省略させていただくことにした。

埼玉大学地学教室で堀口さんに教えを受けた学生さんは非常に多く、それぞれ研究・教育を始め、各方面で活躍されておられる。謙虚で誰にも優しく、かつ、人を育て、しっかりと信念を貫いた方と言うことが出来るよう。

あらためて、生前の研究・教育におけるご尽力とその成果に敬意と感謝を表し、心からご冥福をお祈りする次第である。

（本稿執筆に当たり、文献のご教示・ご提供をいただいた小幡喜一、平社定夫の両氏、写真を提供していただいた小川政之氏に感謝申し上げます）